

## 2 生き返った下駄箱——目瞭然の実験器具棚——

奈良県宇陀郡御杖村は、4つの大字に分かれており、それぞれに小学校があった。そのうちの1つが最初の勤務校である神末小学校である。これらの学校には、学校財産として学校林を持つものもあった。また、それぞれの大字も区有林を持っていて特別財産区として認められており、区の財産を管理するための区会議員がおかれていた。そうした収益の一部が学校の運営に充てられていたのか、学校の備品なども当時としては豊かなものであった。

大掃除の結果、廃棄することになった下駄箱もなかなかのものである。今の物のようにきれいに塗装されたものではないが、しっかりとした木製で、年を経た今もなお、それなりの美しさがあった。幅と高さがそれぞれ 180 cm ほどで、7段7列に区切られていた。

私は校長先生の許しを得て、これを理科準備室の実験器具の整理に使うことにした。汚れを落とし磨きあげたこの整理箱には、セルロイド製の下敷きを切って作った備品名の札や学習班の番号を書いた札を取り付けた。

1番上の段には、アルコールランプと鉄製三脚や金網を並べた。2段目には試験管立てを、3段目には大小いくつかのビーカーを、というように並べ、1列目から6列目を1班から6班に割り当てた。7列目は予備の列である。

この整理箱にはいくつかの利点があった。その1つは、何が破損し、何が不足しているかが一目瞭然であることである。そして、2つ目はもともと雨に濡れた長靴なども入れていたものであり、少々のことには動じない強さを持っていることであった。予備の列からは、必要に応じて補充したので「あれが足りなくて困った」というようなことは

なかったのである。

長い間の使用で木目が浮きだし、節のところが膨らんでいたが、最近の合板製で美しく塗装された備品棚と違い、傷や凹みにもそれなりの美しさがにじんんでいた。作られた時が最高の美しさで翌日からはしだいに汚くなっていく最近の品物に対して、昔から使われてきたものは、歳月を経てそれなりの輝きを増してくるようである。

「古くなったから…」とごく安易にものを捨てる最近の風潮は、ずいぶん気になる。本来の役目を終えたものであっても、2 度目、3 度目の勤め口を探してやりたいものである。